

サービスラーニングにおけるカリキュラムの構成要素：デベロプメント(Development)とマネジメント(Management)の側面から

倉本, 哲男
九州大学大学院人間環境学府 | 水俣市立袋小学校

<https://doi.org/10.15017/3448>

出版情報：教育経営学研究紀要. 7, pp.79-86, 2004-03-31. 九州大学大学院人間環境学府(教育学部門)
教育経営学研究室
バージョン：
権利関係：

【資料紹介】

サービスラーニングにおけるカリキュラムの構成要素
— デベロップメント (Development) とマネジメント (Management) の側面から —

倉本 哲男
(九州大学 / 大学院生 /)

1. はじめに
 - (1) 研究の目的
 - (2) 研究の方法
 - (3) 研究の特色・独創的な点
2. SLカリキュラムの PDS 過程論
～ 内容・方法論的整理 ～
3. サービスラーニングにおけるカリキュラムの構成要素
デベロップメント (統合性) とマネジメント (協働性) の側面から

1. はじめに

本報告は研究資料の紹介に留まるにすぎないが、ここでは、これまでの研究の経緯を振り返ってみる。今一度、研究の目的論・方法論、更には研究の特色・独創的な点を再整理してみることは、今後の研究の進展にとって有意義なことだと考える。

よって、本研究は、サービスラーニングを分析視点に設定し、カリキュラムマネジメント論を構築する上で、示唆を得ることを目的とし、その意味で有効な資料を整理してみる。

(1) 研究の目的

カリキュラムマネジメント論は、単なる教育内容方法論 (Curriculum & Instruction) の立場に焦点を当てたカリキュラム開発論 (Curriculum Development) の概念範疇が拡大し、組織システム運営 (System Operation) レベルまで含むマネジメント論 (Curriculum Management) であると捉える。

そこで本研究では、その分析視点にサービスラーニング (Service-Learning、以下 SL と

略記) を取り上げ、カリキュラムマネジメント論の一断面を理論的・実証的に整理していくことを目的とする。カリキュラムマネジメントにおいて計画 (Plan)・実行 (Do)・評価 (See) の各々の PDS マネジメントサイクルが、学校改善 (School Improvement) に如何にインパクトを与えるかを整理・検証していく。

SL カリキュラムマネジメントにおいて学習過程との整合性を意識しながら、教育目標を達成するために学習者の発達に即した内容を捉え、それを組織化し目標に対応するカリキュラムマネジメント論が、教育内容方法上の指導系列とそれを支える条件整備の経営活動との二系列においてトータルなコンセプトであることの理論的整理と実証を試みる。⁽¹⁾

(中留武昭『学校経営の改革戦略』1999年、pp100-101.)

(2) 研究の方法

SL のカリキュラムマネジメントにおいて理論的全体構造を明らかにしていく上で、米国のケースを取り上げて量的・質的に実証的研究を進めていく。その分析視点には、学校

運営・条件整備の意味での経営過程論とその内容方法に関する教授・学習過程論にそれぞれ「協働性」(Collaboration)、「連関性」(Integration)の概念を基軸に分析していく。

また、実証的データ収集の方法論は以下の通りである。

- ①数多くの SL 研究団体により、SL は全米レベルに普及している。その普及背景や SL カリキュラムマネジメントの方策等を、各団体へのインターネットや電子メールの活用、更には関係文献研究により、全米レベルの SL 全体像(理論的到達点・実践事例の全体像等)を整理する。
- ②研究の客観性を確保するために、郵送や電子メールなどによる量的調査(アンケート調査)を全米の各州教育委員会レベル、各学校レベル・SL 実践者レベルへ依頼する。
- ③ SL の研究校を訪問し、学校長、教師、生徒、地域等を対象にインタビュー・参与観察等を実施し、学校要覧などのカリキュラムマネジメント関係の書類を収集する。

以上のように、理論的・実証的な方法論で研究を進めていきたい。

(3) 研究の特色・独創的な点

これまでのカリキュラム開発論は、主として教師と学習者に関する分野にのみ焦点を当てる傾向があり、カリキュラム条件整備の課題意識が脆弱であった。そこまで含んだ視点からのカリキュラム開発原理をカリキュラムマネジメント論として論じることは極めて少なかったと言える。カリキュラムのシステム運営の視点から考察すれば、カリキュラム開発の計画段階(Plan)は学校システム内で構築され、その実施段階(Do)も組織的なシステムによって展開されていくものである。また、そのシステムには単位学校的な視点、カリキュラム行政の視点、更には地域コミュニティ(Community)に教育経営主体があるケースもあげられる。

以上のような観点から本研究では、これらの要素を典型的に含みこむ SL カリキュラムに焦点を当てることは妥当だと言える。SL

経営過程において計画(Plan)・実行(Do)・評価(See)、そしてシステム改善を含んで再度計画段階へとフィードバックする全経営過程を、連続性のカリキュラム開発・経営論と捉え、各々の PDS レベルが学校改善及び教育の質的向上に如何にインパクトを与えるかを理論的・実証的に整理していく。

すなわち、SL カリキュラムの目標・内容・方法・評価における PDS 過程の全体像を整理することを通して、以上に論じたカリキュラムマネジメント論が学校改善論に如何なる有効性を持ちえるかを研究課題として捉え、一定の示唆を得るようとするものである。

この点に、本研究の特色・独創的な点があると整理できよう。

2. SL カリキュラムの PDS 過程論

～ 内容・方法論的整理 ～

まず、SL カリキュラムの PDS 過程に検討を加える。全米青年リーダーシップ評議会(National Youth Leadership Council)のトール(Toole)は SL のカリキュラムサイクルを計画・実行・評価の段階に分類し(以下、PDS 過程)、それぞれの段階の理論的特徴を以下のように整理している。(James Toole and Pamela Tool 1995)

ただし、本章では内容・方法論的な視点での PDS 過程論である。

①プロジェクトの明確化する段階(Pレベル)

この段階ではサービスプロジェクトの計立案と実践段階のための準備段階である。

サービスカリキュラムの計画段階では、矛盾葛藤を重視する。学習者である生徒の先行経験・既成概念を反省的にリフレクトしていくことでサービスプロジェクトを構成し、立案していく。

そのカリキュラム開発においては生徒が自分自身の興味関心を活かしながら仮説を持ち意思決定をしていく必要がある。ここで SL プロジェクトにはテーマを中心として各教科・各領域内容と統合していくケースが多い。

その学習テーマへのアプローチとして、テーマを中心とした構造的で発達段階に応じた系統的なカリキュラムを開発することから SL 実践が開始される。

その学習テーマの概念を深化・拡充するためにもテーマ単元が生徒の興味関心、先行経験との連関を図り統合されていくものでなければならない。その意味でも学習プロジェクトに対するアプローチにおいては、生徒がコミュニティのイシューを明確にしながらか自覚し、それを内在化していく必要がある。

② サービス実践をする段階 (Dレベル)

市民性の育成が基本的な教育目標であるから、学習成果自体よりも学習プロセスを重視する段階である。つまり、学習者の興味関心、ニーズ等に応じて意思決定をしながらも社会的に貢献する心情や態度を重視する段階である。このサービス活動の結果として学習者の人格がより望ましい方向に形成され、民主社会の構成員としてのセルフエスティームが高まることになる。

③ 学習の振り返りと新たな理解 (Sレベル)

学習者は、せつかくサービス体験をしても、もしも何の反省的な時間を設定しないのであれば、その学習の意味を無意識に自覚しないままに終わる場合が多い。そこで、サービス体験の意味を再考する意図的な学習機会を提供していくことが重要である。具体的には以下のような点について反省的な思考・リフレクション (Reflection) を働かせ、サービス活動の再認識と今後の学習の連続を保障する活動とする。その重要項目をあげておく。

- ・サービス活動を通してコミュニティの変革にどのように関わったのか。
- ・サービス活動から新しく学んだ知識をどのような場面で再度活かせるのか。
- ・コミュニティに主体的に関わったことは自分にとってどのような意味があったか。
- ・どんな人間関係・アカデミックスキルやセルフエスティームを学んだか。

これらの反省的認識を活用しサービス単元を通して、PDS の各段階とフォローアップ段階を通してリフレクションの統合を図り、

次なる SL カリキュラムを発展的に開発していくことになる。

よって、教授学習会手の側面に焦点を当てれば、以上のように SL カリキュラムの PDS 過程が整理できると言えよう。

3. サービスラーニングにおけるカリキュラムの構成要素：デベロプメント (統合性) とマネジメント (協働性) の側面から

本章では条件整備論の視点と内容方法論の視点から構成要素について資料を提示する。

① オンライン調査

実証的研究を進める上で、インターネットを使用して、SL の実践者レベル・実践学校レベル・学校区レベル・州レベル・NPO (Non Profit Organaization) を含む SL 教育関係者にアンケート調査を実施中である。

以下に、その一部を例示する。

I am Tetsuo Kuramoto, PhD. candidate in Japan focusing on Service-Learning.

I am working on a research project for my PhD. program and need to survey service-learning practitioners here in the United States.

There is one survey geared for administrators and a second is directed to teachers.

Service-learning is the joining of communities and schools to administer some sort of service to the community.

(e.g. helping the homeless, conservation projects, disaster relief, caring for the elderly, school to work programs, etc.) Please click here to fill out the survey.

<http://www.haracs.co.jp/quest1.html>

<http://www.haracs.co.jp/quest2.html>

(アンケート内容の一部は以下の通り。)

From an administrative point of view
Choose three of the following that you feel are the most important aspects of a service-learning project from an administrative point of view.

1. Making clear educational goals for myschool through collaboration with community members/parents in service-learning.
2. Using service-learning goals to improve other school goals and make other school aims clear.
3. Making common goals for teachers of different subjects.
4. Revitalization of the school staff through training focused on finding out students' interests.
5. Organization of practical issues such as scheduling. (i.e. doing service-learning all

day one day, or blocking it into the regular schedule for daily service-learning time.)

6. Organization of instruction

"Team teaching".

7. Development of teaching materials.

② 条件整備と内容方法のチェックリスト

以下の出典よりチェックリストを要約し、筆者が加工したものである。これは「協働性」「統合性」の視点から整理できる。

(出典 Learn and Serve America, Essential Elements of Service-Learning, 1999.)

サービスラーニングを支援する教育機関の基本的要素（「協働性」の視点から）

○ミッション（教育目標）とポリシー（教育的方針）

1) 効果的なサービスラーニングは、学校レベルと学校区レベルのミッション（教育目標）とが協働する。

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
SLは学校区と学校のミッション（教育目標）と協働する	学校や学校区のミッションと関係なく教師個人の信念や思いによってSLが創られている	（市民教育や道徳教育などのように）学校区のミッションや学校の教育目標の構成要素として、教師個人レベルのSLが構成されている	SLは学校の教育目標と強固にリンクしている。その目標に具体的に合致する手段として学校レベルで全職員に認知されている	SLが学校や学校区の中心的実践として位置付けられ、学習の本質的転換としてサービスによる学習の確立とコミュニティにサービスする市民性育成の相互目的でSLを展開する

2) 効果的なサービスラーニングは、実践の質を保證するためにデザインされた学校区のポリシーや学校のポリシーによって支援されている。

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
学校区と学校のポリシー（教育的方針）がSLを支援している	現行の学校のポリシーの範囲で、SLが実践されている。学級レベルの教授方法にのみ合致してデザインされている。	学校レベルのポリシーを踏まえてSL実践をすることが基本ではあるが、全学級に徹底しているわけではなく、例外的な実践もみられる	学校区のポリシーの具現化に努める姿勢が学校レベルで浸透しており、学校区の行政官はシステム的にSLの実践効果を上げるポリシーを常に検証している	学校区レベルのポリシーを受けて学校区レベルでも明確なSL実践ポリシーが定着しており、個々の教師にとってSL実践に取り組むことが自然な状態になるまで浸透している

○教育機関の構造と教育的資源

3) 効果的なサービスラーニングは、その実践の質の保證のためにコミュニティの多様な教育機関・教育的資源によっても構造的に支援されている。

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
学校レベル・学校区レベルでの予算が、SL実践のために位置付けられている	SL実践のために、学校レベルでの現存の予算・リソースのやり繰りや自動努力によって為されている	SLは正規の学校予算の範囲外の公的・私的な予算・リソースによっても運営される。CNSのようなSLのためにデザインされた特別奨学金制度や、職業訓練予算・道徳教育予算・暴力防止予算・青年発達予算などのSLを推進する州がイニシアティブを執る予算が活用される。	SLは学校レベルのカリキュラム予算成立の範囲ではなく、行政レベル（学校区レベル・州レベル）での特別プロジェクトと学校レベルが一体となって協働し、予算確保をする特別なプログラムであると認識されている。このレベルでは学校・行政に對等のイニシアティブ関係がある。	レベル3に加えて、学校と学校区の変なコーディネーションのために、追加的な予算配分が行われる。この予算執行は、学校側によりイニシアティブがある。
学校区がSL実践のために交通手段を提供する	交通手段は個人的レベルに依拠し、教師や生徒が自分自身で責任を持つ。	交通手段は学級単位で提供する。学級配当予算や他の特別予算でカバーする。バス・バンなどを使用したり、その他の多様な手段で生徒輸送をする。学校区専属の輸送車や無料の公的機関などを複合的に利用する。（RSVPなどの保険保證された学校区が認める交通機関に限る）	SL実践開始にあたって、担当教師が一定の推薦基準を満たしているケースでは、SL実践予算措置ができ、このなかで生徒輸送に使用できる。 ○基準1・教師がSLの研修単位を満たしている場合 ○基準2・生徒が複数の場所でサービスし、生徒輸送が必要と認められた場合	レベル3に加えて、SL実践のために特別に専用のバスやバンが学校区に用意され、必要に応じて利用できる。
学校のスケジュール（日常の時間割・年間計画）とSLとの位置付けが明確である。	教師は現行の授業時間内のみでSL実践を実施している。	主として教師は正規の授業時間内でのSLの実践化をしている。しかし、実践を完結するために授業時間を延ばすこともありえるが、そのために生徒は他の授業を受けられないこともありえるので、計画ではない。	授業時間は変更される。SL実践を学校レベルで実施するために、必要に応じて学校単位で時間割を変更することもある。ブロック時間を使用するのが一般的である。SLの実践にとって効率を上げるための諸方法が必要である。	SLにとっての障害となるものを検討し積極的に学校単位で時間割の組み方を工夫していく。SLを含む経験主義的教育システムの質を高めるために、学校で考案される時間割には柔軟性と十分な時間を保證する工夫がなされている。
学校関係者・行政がSLをサポートする	SLの担当官（行政官）が学校の現行カリキュラムの範囲でSLに関わるが、十分に事前準備がなされた状態ではなく、ときとして教師や生徒の意思が十分に反映されていない。	レベル1に加えて、サービスの担当者は事前に教師や学級（生徒）と会合を開き可能な限り教育的リソースの必要性を協議し、実践のアイデアを交換しておく。	レベル2に加えて、（スタッフ会議・教育局会議・PTA会議など）を含む学校の範囲で十分に担当者と意見交換をして、サービスの質を向上させる。	レベル3に加えて、サービスの担当者が学校区における中心的役割を果たし、手作りのプログラムを作成したりする。そこには全面的で活動的な関係機関のサポートがある
学校がSL実践に伴う危険性に関する危機管理意識がある	オフキャンパスでの活動であるにもかかわらず、親に対する十分な説明もなされていない。学校の保険と連担せで、危険性に関する十分な配慮がなされていない。	サービスの向上のために、学校側がオリエンテーションセッションで生徒・親に対して徹底的に安全性について説明する。しかし、学校の保険制度に基本的に依存する。	学校で規定する安全対策書（取り決め）があり、SLのようなオフキャンパス専用の保険がある。ここでは学校単位の任意である。	州レベル・連邦政府レベルのSLの危機管理に對する一定の政策があり、その保證のための保険制度も明確に位置付けられている
学校や学校区のコーディネーションによってSLが実践化されている	各教師は公的な学校区によるアシスタントや支援もなく、個人的努力によるのみ実践を進める。	SLカリキュラムデザインを支援するアシスタント（SL専科ではない）が、そのプロジェクトのためにコミュニティからの支援者を募る場合がある。	そのアシスタントが、学校のSLカリキュラムデザインのために一人やそれ以上の正式契約プロジェクトのためにコミュニティから結んで、その実践化をサポートしている。	SLの実践を円滑に実施できるように、正規のSL職員（フルタイムワーカー）が学校区や学校単位で加配されている。

○職業的発達

4) 効果的なサービスラーニングは、サービスラーニングの教育学的・専門的な研修機会が教師・スタッフ（関係者）に提供されている。

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
SLのトレーニング（研修）が興味のある人や学校関係者のために提供されている	SLに関する職業的訓練・研修は教師自身の時間と自己研修で行われる。	SLに参加するための教師用スタッフ訓練基金が奨励される。（ワークショップ・会議・関係イベント）しかし、学校区によるSL職業訓練研修時間は設定されていない。	SL情報に関心のある関係者・教師・教育行政官等のために学校区とサービス場所をコーディネートし、学校区が職業訓練プログラム（SL研修）を積極的に提供する。	レベル3に加えて、学校区がSL研修を初心者・中級・上級別に提供する。上級者は、初心者の研修を担当する場合もある。全ての行政官は、初心者レベルの研修を必修とされている。

5) 効果的なサービスラーニングは、スタッフ（関係者）にネットワークを協働化し、実践の再定義・再構成のために学校内外で他のスタッフと協働して問題解決にあたるシステム化（研修機会）が確立されている。

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
SLの実践者にとって職業的訓練を継続的に研修する機会が用意されている	教師は、教師自身のアイデアやリソースの活用によって実践化する。しかし、SLの公的機関等による構造的支援（研修機会等）は整備されていない。	職業訓練研修基金が、SLに関連する研修のために用意されている。時折、SL実践者どうして実践経験を分かち合い、カリキュラム構成に役立つような研修機会が設けられている。	レベル2に加えて、SL実践者のための少なくとも月に一回は定期的に研修機会が設けられる。スタッフは教材やアイデアを分かち合う。実践者相互の実践をリフレクトし、その実践を深化・問題解決する。重要な実践記録やリソースは紹介し合い、議論を交わすことができる。	レベル3に加えて、新しく実施されるプログラムで職業訓練的研修である。職業的集団（コミュニティ）を理解し、SL授業観察（公開研究授業）のために時間をコーディネートし、他の実践者が観察できる機会を設ける。時間と予算の設定はSLカリキュラム開発の一端として理解されている。

内容方法論的視点から（「統合性」の視点から）
○学習に関する要素

1) SLの教育的効果を上げるためには、アカデミック教科からのスキル・内容・概念をサービス活動と統合することで生きた知識へと転換することを重視する。この方法論により教科学習そのものにも生徒の興味関心を湧かき立たせる効果がある。

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
カリキュラムの目標の明確化と学習者の教科の既習事項との関連性を持つ	・学習結果はあいまいで、カリキュラムの中心目標とゆるく連関している。	・学習結果がさらに明確に述べられ、少なくとも一つはカリキュラムの中心目標と連関する。	・複数の学習結果があり、その結果がカリキュラムの中心目標と強く連関している。	・レベル3に加えて、事前に形成したカリキュラムの中心目標との連関性を超越する切実な統合性を示す。
学習活動が概念とスキルの適用を刺激し、それを獲得していく	・学習活動の一つはカリキュラムの中心目標に幾分連関して通常の学習に付加的に加えられる。	・学習活動の幾つかはカリキュラムの学際的な内容と連関し、全サービス活動の中でコアの概念とスキルに連関することを生徒に求める。	・全学習活動は直接的に中心目標に連関する。コア概念とスキルの適用は、常にサービスとリフレクションによって検証される。	・レベル3に加えて、サービス活動が単なる学習コースの要件以上に概念とスキルの広い範囲での獲得と転用を刺激する
高いレベルでの思考力や知識の構築・構成を促進する	・生徒はサービスプロジェクトを実行するために低いレベルでの思考スキル程度しか要求されない	・生徒はサービス活動を実行するために、新しい情報にアクセスし、見通しを持つことを求められる	・生徒は高いレベルでの思考スキルを求められる。情報を複合化して、サービス活動を遂行するために新しい意味付け・理解・解決手法を学ぶ。	・レベル3に加えて、複合状況を解決するために順序だてて思考するスキルも獲得する
生徒は情報やアイデアを共有することを要求される	・生徒はほとんどレポートや討論などのアイデアやコミュニケーションを要求されない。概して教師に伝える程度のものである。	・生徒はレポートや討論などを主要なコミュニケーションの手段とする。しかし、通常限られた範囲内での活動であり教室内等である。	・生徒は複合的な方法（レポート・討論会・グラフィック等）で、多角的な目標の下にコミュニケーションを行う。例えば、コミュニティメンバーや教師・親・級友等に対してである。	・レベル3に加えて生徒は多様な聴衆者に向けて情報を発信する。
州や地方教育局の標準レベルに連関する	・教師は意図的には生徒の活動を州の標準レベルに連関させていない	・教師は部分的には生徒の活動を州や地方教育局の標準レベルに従うことを意識している	・教師は直接的に州の標準レベルや地方教育局に従い、生徒の活動を連関させている。	・レベル3に加えて、SLは公共の知識であり、州や地方教育局の標準レベルに合致する教授方法で実施している

2) SLの教育的効果を上げるためには、社会的認識の発達を促し社会参加に積極的に貢献する態度を育てるタスクに生徒が従事することができる事を重視する。

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
サービスのタスクは挑戦であり、認識の発達を促す	・生徒は本質的に傍観者であるが、大部分はサービスの主要な提供者・アシスタントである。	・生徒は既習の知識やスキルを相対的に周知の状況や約束事の中で必要とする。これによって社会的認識が発達する。	・生徒は新しい約束ごとや状況の中で、身体的・認識的・社会的、更に論理的に挑戦して打開していくことを求められる。	・レベル3に加えて、問題点の内部外部の要因を明らかにして通常の生徒ができることの限界点を超えてストラテジーを工夫することができる。

3) SLの教育的効果を上げるためには、アカデミック教科からのスキル・内容・概念如何にサービス活動と統合できるかを考慮し生徒の学習を効果的に促進するために、学習と評価の一体化を図ることを重視する。

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
評価と教授の一体化	・学習は期待されるが、その目標は明確にされていない。そして、評価は、インフォーマルであり単一的な評価方法による。例えば、インタビュー等である。	・学習目標はプログラム構想に部分的に把握されるが、期待されるパフォーマンスの水準に合致することを明確に求められる。(評価Aを取らなければならない等)	・生徒の学習評価は、意識的にダイナミックな教授道具であり(単なる評価ではない)、経験的・質的向上に貢献する。生徒に洞察力・評価認識・デモンストレーション・批判的思考力などの多様な能力を育成する。	・レベル2・3に加えて、異なる方法で、一体何が学習できたのかユニークな方法で他者とコミュニケーションをする。

○サービスに関する要素

4) SLの教育的効果を上げるためには、コミュニティや学校のニーズを考察し、それに応えるための目標を設定する事を重視する。一方でそのサービスの効果を実感できるようなサービスタスクを構成し、生徒が従事していく。

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
サービスの目標が明確に確定している	目標が生徒にとってクリアにされていない。	一つそれ以上のサービス目標が特定されている。しかし、アーチ向上にかかる目標は生徒にとってクリアではない。(生徒は老人に親密になって世話ができるが社会的福祉制度の整備や年齢を重ねることの人生観等理解が十分ではない)	サービスの特定の目標や長期的目標が全ての参加者のコミュニケーションがよくいっている。	レベル3に加えて全てのサービス参加者の同意と支援がサービスの目標の下に発達の状態にある。
何が必要かの明確化	必要性を明確にすることでマイナー概念が形成される。あるいは、その概念が重要なものであっても参加者に自覚されていない	サービスの供給者・需要者の立場の人々にとっての必要性の視点から、いくつかの明確なポイントを明らかにする	必要性の明確化が重要な意義があり、コミュニティと参加者の双方にとって受容性を認識することができる	必要性の明確化が深化した状態であり、コミュニティへの重要性を認識できる(自然災害後のコミュニティ復興・長期的に社会的問題に関わる)
サービスタスクとその結果が意義重要性を持つ	生徒は役立つアシスタンスではあるが、本質的にはコミュニティエージェンシーによって支援されている	生徒は、特別なスキルや知識を持ってエージェンシーの目的にそって中心的な役割を果たすために有効なアシスタントになれる	レベル2に加えて生徒の以前のサービス活動に新しい規模(経験)を加える。生徒を援助せずにはいられないような援助を提供する	レベル3に加えて、生徒のサービス活動が明らかにされたコミュニティのニーズに対応する救済(援助)を提供できる

5) SLの教育的効果を上げるためには、サービス効果を念頭に置きながら体系的・概略・継続的なリフレクションによって評価方法(ポートフォリオ等)を確立する

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
サービスの結果の評価	評価に、いつ・どこで・どのようになどの形式的な形がない。あいまいである。	評価計画は、教師によって開発され、レポート・インタビュー・デスクッション・質問紙等の方法による印象や情報を集めることによって構成されている。これは、概括するためのものであり、プロジェクトを進展させる視点が弱い。	評価計画は実施前から用意周到に構成されており、生徒はサービス活動に対して明確な目的意識を持っている。また、サービス活動の構成に強い関心を持っている。評価は活動前・中・後に実施されプロジェクトをモニターし、改善する手段として位置づけられる。またここから、次ぎの段階に改善点を提案し、よりよくプロジェクトを構築する	生徒・教師・コミュニティ構成員の全ては評価活動に参加している。評価はサービスをする人の視点からと受ける側の視点からのコメントで構成される。評価は、コミュニティの各種団体・親・学校関係者等も含めて実施される

サービスラーニングにおけるカリキュラムの構成要素

○学習とサービスを支援する検討的要素

6) SLの教育的効果を上げるためには、そのサービスの選択・構成・実行、更にはサービスプロジェクトの評価などにおいて、最大限に生徒の声（要求）に応じ、生徒の意思決定を重視できる。

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
生徒の意欲（声）を励ます	教師によって用意された範疇で教師がデザインしたプロジェクトにしたがって活動をを進める	生徒は教師によって提供された幾つかの選択肢の中から選んで課題選択学習の形式を取る	生徒はサービスプロジェクトの選択・デザイン・実行・評価の全ての段階で自らの意志を反映させることができる。	レベル3と同様に、もしも可能であれば教師やコミュニティ構成員からのアドバイスを踏まえながらも基本的には、サービスプロジェクトの選択・デザイン・実行・評価の全過程で生徒自身の実践力によって企画されていく
支援者としての教師の役割増大	教師はサービスと学習のほとんどの局面において、管理し指導をしていく	教師は基本的には学習のほとんどの局面においてその指導性が強い傾向にあるが、生徒の興味関心を可能な限り活かそうとする傾向を出始める	生徒がサービスと学習の重要な局面に関わる	サービスと学習の全過程において生徒自身が自ら課題を形成し実践できるように、生徒の頑強りを評価し奨励する。生徒の意見を尊重する態度を示す

7) SLの教育的効果を上げるためには、サービスの参加者・実践性・結果等の多様な視点を重視する。これによってサービス活動の価値付けができる。

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
多様性が討議され価値付けられる	多様性はサービス前・中・後のどの段階でもほとんど議論されることはない。	多様性は評価されているものの、生徒が持ち出したときぐらいにしか意識されずカリキュラム構成上も部分的にすぎない	多様性はサービス活動の検証にとって一つの重要な鍵とされる。更にカリキュラム開発上配慮される点でもある	多様性は、サービス活動のリフレクション・問題解決学習などを組みこんで全活動で重要視される。それは、サービス活動自体ではなくて社会正義と公正さの実現に関する社会問題に直面する。
多様な団体の参加が奨励される（協働性について）	サービス活動は相対的に同一的性格を持つ団体同士での支援状態である	多様な団体や個人と参加者がともになって、ひとつの団体が他の団体を援助する状態である。（生徒が老人の介護をする）	サービス活動が多様な参加者とともに協働していく	サービス活動が相互に支持しあった関係性において、多様なコミュニティ構成員や参加者が広範囲で協働し含みこむ

8) SLの教育的効果を上げるためには、コミュニティを相互的に連関し、コミュニケーション・パートナーシップを促進する事を重視する。更に、参加者同士の協働性を高めることができる。

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
教師と生徒はコミュニティの教育的資源に精通する	教師と生徒はコミュニティの資源に関する知識とパートナーシップの潜在性の有効利用の経験がほとんどない	教師と生徒はコミュニティの資源に関する知識とパートナーシップの潜在性について幾つかのキー概念を学習している	教師と生徒はコミュニティの資源に関する豊かな知識とパートナーシップの潜在性について獲得して利用できる状態である	レベル3に加えて、教師と生徒自身が、学校外でのコミュニティと知識を分かち合える情報源となっている。
コミュニティの教育的資源や親にコンタクトを取れる	ほんの最小限度程度の教師・生徒・サービスパートナーにおける協働性しかない状態。教師がプロジェクトをセッティングし生徒がそれに従事する関係である。	一つか二つ程度の個人やコミュニティの代表者が教師、生徒のサービスプロジェクトの援助をする状態。あるいは、そのサービスに関する相談に応じる	サービス遂行の目標達成のために、一つ以上のコミュニティ団体が継続的にパートナーシップ提携を結んでいる状態。	個人とコミュニティ団体は学校をコミュニティ教育資源としてみ直すようになる。枯れ葉生徒の学習とスキルはコミュニティの問題を解決するために役立つものであると評価するようになる。
コミュニケーションの役割が明確にされ、教育的効果（結果）が親の中で認識されている	コミュニケーションは不定期であり、無計画である。意図的なサービス結果・責任・役割などに付いて誤解を招く結果となりが親の中で認識されている	役割や責任・サービスの結果についてはパートナーとともにプロジェクト遂行のセッティングの際に合意がなされている。しかも、プロジェクト完了後に再検討が加えられる	役割や責任、更には葛藤や他の大きなイシューをまかなう手続きにおいて、プロジェクト実行以前から明確な合意がなされている。コミュニケーションの機能性を保持するためにパートナーとの開かれた協働性に配慮されている。フィードバックとディスカッションは計画的に位置付けられ、その遂行を奨励する	コミュニケーションがダイアログに発展し、そこから、ルールや責任に関する新しい知覚が出現する。コミュニティは重要な教育的パートナーであり、学校も重要なコミュニティ改善のパートナーに位置付けられる。

9) SLの教育的効果を上げるためには、サービス前に生徒達に自己の役割、必要なスキル・要求される情報・協働する人々への思いやりの感性等を理解し、それらの全ての経験の様相を含んだ準備をさせ、自己とサービス対象の連関性を自覚できる。

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
生徒の既習事項・態度・スキルを探索する	プロジェクト分野に関する生徒の先行経験を振り返ることなくプロジェクトが計画される	プロジェクトに先立って教師はそのプロジェクト分野に関する現在の生徒の既習事項・スキル・意欲関心態度などの到達度を明らかにする。質問紙やディスカッションなどの方法を使用して調査する	レベル2に加えて、プロジェクト分野に関する理解レベルに基づきプレゼンテーションの準備を生徒が実施する。教師はこのプレゼンを受けて現段階での生徒の理解度のレベルを確認する。このプレゼンの後に生徒自身が今後のプロジェクトに必要な準備・トレーニング等を決定していく。	レベル3に加えて、全てのプロジェクトとプレゼン終了後に情報を収集して、生徒は次の参加者のために役立つガイドや教材などを作成する。
生徒をコミュニティやパートナーとして協働してくれる人々のもとへ順応する	プロジェクトの始めに、オリエンテーションを実施する。	プロジェクトに先立ち、教師とコミュニティの代表者はサービスに携わる人々やコミュニティのニーズやエージェンシーについての情報などを共有する	レベル2に加えて、生徒は自分自身のプロジェクトを通してのコンタクトに付いての理解を深め情報を更に収集していく。自分自身でも自己学習を進めるトレーニング等もしたりする	レベル2・3に加えて、このプロジェクトを通して社会的政治的なイシューに関しても幅広い見識をもてるようになる。（貧困問題・高齢化社会・公害・差別・ホームレス）これらは生徒が専心するようなプロジェクト例である。
信用できる安全性の確保・準備	プロジェクトが始まる前に教師が安全性についての情報を提供する。（学校でやその職場などで）	教師が安全なパフォーマンスのためにその注意書きなどの情報を提供したり、親もパートナーの一人になって生徒のプロジェクトの安全性（授業計画）を監督する	プレゼンテーションに基づき、生徒と教師は起こりうる危険性を回避するために事前に十分な計画と話し合いを進めておく。	生徒の研究に基づき、授業でプロジェクトに関する危機管理計画を進展させる。これはその専門家に相談をしてチェックを済ませ、コミュニティパートナーや教師・教育機関関係者の承認を受ける。
コミュニティのパートナーとしての期待に添う生徒の役割づくりの確立	教師はプロジェクト開始前に学校で一般的な期待と役割について生徒に説明する。	授業中に教師やコミュニティの代表者が生徒の役割や期待される明確な姿について説明を行い、その割り当てを実施する	教師やコミュニティのパートナーが、生徒とともに共同に十分なディスカッションを行い合意に基づき、期待される姿（仕事）や役割について明らかにしていく。	教師やコミュニティのパートナー・生徒によってサインされた協働同意書の写真真を生徒自身が描くことができる。反省を含み、発展的に状況とともに変容していく。

10) S Lの教育的効果を上げるためには、カリキュラム実行の中心項目に常にリフレクションを組み込み、そのリフレクションをサービス前・中・後、各段階で批判的思考力を有効に生かしサービスを検討していくことができる。

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
リフレクションはサービスの前・中・後で行う	リフレクションは時々起こり、通常サービスイベント終了後に実施するだけである	リフレクションは継続的にサービスイベント後になすものである。しかし、サービス前と途中においては十分でない	リフレクションは、サービス活動の前・中・後に継続的に行う。 これが典型的なサービスラーニングにおける特徴である。	レベル3と同様に、生徒は結果として自分自身の洞察力と考え方を発展させて身に付けている。
リフレクションに複合的な方法を取る	主として一つの方法で生徒をリフレクションに従事させる（ジャーナル・教師との面接・生徒によるプロジェクト）	2・3の方法で生徒をリフレクションに従事させている。	メディアや複数の方法で、複数のグループでリフレクションを行う （芸術的・ビジュアル・会話的・レポート的） （個人作業・小グループ・学級全体など）	レベル3に加えて、生徒は自分自身の構想（リフレクションの道具・ガイドラインなど）を創造する。
リフレクションにおいて全ての参加者が活用する	生徒は個人だけでリフレクションをする（教師との個別面談や個人ジャーナル）	生徒は個人作業と同じように生徒相互にリフレクションをする	サービスに参加した生徒全員でその経験を分かち合う（生徒・教師・教育ボランティア・コミュニティメンバー・サービスの受益者・提供者全ての関係者）	全ての団体が含みこまれるというよりは、もっと積極的にリフレクションを協働して実施する。
生徒の全てが高いレベルの批判的思考力を活かし方を学習する	生徒は主としてサービス経験を通じて何が起こったかによってリフレクトする	生徒は過去も振り返り何が起こったのか、経験を総合的に分析をしてリフレクトし始める	生徒はサービス経験から学習したことを分析し、総合し価値付けをして知識を獲得していく。更にそれを自分自身の生活と重なり合わせながら、コミュニティの 이슈へ視野を広げていく	レベル3と同様に、社会的責任・公的な政策・市民性などの広い視野での 이슈にまで関心を広げ、将来直面するであろう問題解決のためのプロジェクトを考案するようになる。
全教育活動がカリキュラムの目標に関連している	事前に設定したカリキュラムの目標と合致することなくリフレクションが行われる。	幾つかのカリキュラム目標とサービスプロジェクトの関連性を提供できるようにリフレクションが行われる	リフレクションはカリキュラムの中心項目であり、批判的に目標の形成を検討したいり、カリキュラムの目標が実践と合致しているのりリフレクションを通して検討する	レベル3に加えて、生徒のリフレクションを高い思考レベルへと導き、予知できないものをあきらめることなく生徒の要求などを追求・深化させる。

11) S Lの教育的効果を上げるためには、生徒のサービスを自認し相互に確認しあうことによって、更なる意欲の喚起が必要である。その手段として祝福パーティー等を行うことができる。

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
公共性（学校内外）で、生徒のサービス活動の効果が認識し、振り返らせるためにさせるために授業中に反省会などを催す	教師は教室内で、生徒のサービス活動の効果を認識し、振り返らせるためにさせるために授業中に反省会などを催す	レベル1に加えて、コミュニティパートナー・教育関係者・親・コミュニティリーダー等を教室に招待してサービス活動の貢献について反省会を催す	レベル2に加え、生徒は教室外での振り返りの機会を持つ。 （生徒アッセンブリ・報道機関の利用・コミュニティイベント等）サービス分野での習熟者を招待しての形式的な振り返り認識機会を持つ	新しい視野の広がりを持つ。生徒は社会の受益者だけでなく、サービスの社会的提供者である自身と自覚を持つ